

たぬき囃子

野村胡堂

—

「親分、あつしは、氣になつてならねえことがあるんだが」

「何だい、八、先刻から見えていりゃ、すっかり考え込んで火鉢へ雲脂ふけをくべているようだが、俺はその方が余つ程氣になるぜ」

捕物の名人銭形の平次は、その子分で、少々クサビは足りないが、岡っ引には勿体ないほど人のいい八五郎の話を、こうからかい氣味に聞いてやつておりました。

遅々ちちたる春の日、妙に生暖かさが睡りを誘さそつて、陽が西に廻ると、義理にも我慢の出来なくなるような薄霞うすがすんだ空合でした。

「ね、親分、あつしは、あの話を、親分が知らずにいなさる筈はねえと思うんだが——」

「何だい一体、その話でえのは？　横丁の乾物屋かんぶつやのお時坊が嫁に行つて、ガラッ

八ががっかりしているつて話ならとうに探索が届いているが、あの娘の事なら、器用にあきらめた方がいいよ、町内の良い娘が一人ずつ片付いて行くのを心配していた日にや、命が続かねえぜ」

「冗、冗談でしょう、親分、誰がそんな馬鹿なことを言いました」

「誰も言わなくたって、銭形の平次だ、それ位のことには目が届かなくちゃ、十てとりなわ手取縄を預つていられるかい」

「そんな馬鹿なことじゃねえんで——あつしが気にしているのは、親分も薄々聞いていなさるでしょうが、近頃大騒ぎになっている本所の泥棒——三日に一度、五日に一度、選りに選つてたいけ大家の雨戸を切り破る手口は、どう見ても人間

業じゃねえ。石原の親分じゃ心もとないから、いずれは、銭形の親分に出て貰つて、何とかしなきゃア納まりがつくめえ——つて、先刻さなつきも銭湯で言っていました。だが、あつしもそりゃアその通りだ、うちの親分なら——」

「馬鹿野郎ッ」

皆まで言わせず、平次はとぐろをほぐして日向ひなたへ起き直りました。

「へエ——」

「へエ——じゃないよ、世間様の言うのは勝手だが、手前までそんな事を言やがると承知しねえよ」

「相済みません」

「本所は石原の兄あにき哥の縄張りだ、頼まれたって俺の出る幕じゃねえ。それに、石原の兄あにき哥にケチなんぞ付けやがって」

「——へエ、面目次第めんぼくも御座いません」

「馬鹿だなお前は、何て恰好だい、借金の言い訳じゃあるまいし、そう二つも三つも、立て続けにお辞儀をしなくたってよかろう。それに、膝あわせツ小僧なんか出してさ。一体お前なんか、そんな身幅の狭い裕あわせを着る柄じゃないよ——ウフ」
平次も到頭吹き出してしまいました。こうなると、何の小言を言っていたか、自分でも判らなくなってしまう。

「御免下さい」

折から、入口の格子の外で、若い女の声。

「八、ちよいと行って見ておくれ、どうせお静の客だろうが、生憎あいにく買物に出たようだ」

「へエ——」

ガラッ八の八五郎は、それでも素直に立上がって今叱られたばかりの狭い裕あわせの前を引張りながら縁側から入口を覗きましたが、何を見たか、弾はじき返された

ように戻って来て、

「親分、た、大変」

日本一の酔っぱい顔をします。

「何だ、騒々しい」

「石原のが来ましたぜ」

「利助兄哥か」

「いえ、娘のお品さんの方で——」

「何だ、早くそう言えはいいのに、丁寧^にこちらへお通しするんだ。それから、お茶を入れる支度をしてくれ、——何時までもそんなところに突っ立ってる奴があるかよ、坐^{って}取次ぐんだぜ、膝^ツ小僧に気を付けな、お品さんに笑われるじゃないか」

平次は小言を言いながらも、この面喰^{った}正直者を、^{かば}庇うような眼差しで見

送りました。

二

お品というのは、石原の利助——平次と事毎に張合った、本所の御用聞——の一人娘で、この時二十二三だったでしょう。二三年前一度縁付いて、夫に死なれて父親の許へ帰って来ましたが、若後家というよりは、如何にも娘々した、水の垂れたそうな美しい女振りでした。

襟の掛った黄八丈、妙に地味なしゅす縹子の帯を狭く締めて、髪形もひどく世帯染みてますが、美しさかえ反ひとしおって一入で、土産物の小風呂敷を、後ろの方へごうまん慎ましく隠して、平次の前へ心持うつむ俯向いた姿は、傲慢で利かん気で、苦虫をごうまん嘯み潰したような顔を看板にしている親の利助とは、似ても付かぬ優しさのある娘です。

「お品さんが来てくれるとは珍らしいネ、お静は折悪しく買物に出かけたが、どうせすぐ帰るだろう、ゆっくり話して行つて構わないだろうネ」

小さい時から知っている平次は、ツイこう言った、わけ隔へだてのない心持で、渋い茶などを入れてやりました。

「有難う御座います。そうもしてはいただけませんが、——実は折入つてお願いがあつて伺いました」

娘はモジモジして、何やら言い兼ねている様子です。

「お品さんが、私に？　へエ——どんな話かは知らないが、私に出来ることなら何などとして上げよう——何、人がいちや言い憎い話？　大丈夫、お品さんも知っている八五郎が一人いるだけで、あとは皆んな出払つている。八なんざ馬みたいなもので、何を聞かしたつて構やしない——あッ、そこにいたのか、ハッハッハッハッ、こいつは大笑いだ」

平次の高笑いに吹飛ばされたように、ガラツ八は納りの悪い顔を、次の間へ引込めてしまいました。

「実は親分、お聞きでしょうが、あの本所の押込み騒ぎ——、昨夜は六軒目で、番場町の両替渡世井筒屋清兵衛がやられました」

「そうだってね、利助兄哥もさぞ心配だろう」

「それが親分、困ったことになってしまいました。何分入られたのは六軒共大きい家ばかりで、盗られた金も少くない上、昨夜はとうとう人まで害めるよあやうなことになったので御座います」

「ほう、それは大変」

「井筒屋の旦那が、折悪く目を覚おりあしして、縁側まで出たところを、脇差で袈裟掛けさがけに斬られたのだそうで御座います」

「フム」

「そうではなくてさえ、石原のも年を取ったとか何とか、世間ではうるさく言いますし、お上の方でもこの間から、何とかやかましく仰しゃいます。石原の利助が、五十近くなつて、十手捕縄を召上げられるような事があつては、世間へ合せる顔もないと言つて、夜の眼も寝ずに飛廻りましたが、今度ばかりは何としても手掛りがありません。あの負けん気の父が、すっかり気を腐くさらせて、三日前から到頭寝込んでしまふような始末で御座います」

「それは気の毒な」

「今日も、平常ふだんお世話になつている、井筒屋の旦那が殺されたと言ふのに、行つて見ることも出来ません。子分衆に任せて、一人で気を揉もんでおりますが、御存じの通り、身内にもあまり役に立つのもありませんので、はたで見ている私の方が気が詰るようで御座います」

お品は涙ぐましい眼を落して、暫く声を呑みました。

「それは、さぞお困りだろう、私に出来ることなら、して上げたいが――」

「親分、私は親に隠れて、お願いに伺いました。この儘放つて置けば、石原の利助の一代の名折れなお、十手捕縄を召上げられないものとも限りません」

「――」

「日頃は親分との間に、面白くない事もあるように聞かないではありませんが、親分は江戸中で評判の腕利き、それに、人の難儀を黙って見ていらつしやる性分でないことも存じております。どうぞ、親子を助けると思召して、一と肌脱いでは下さいませんでしょうか。親分、お願いで御座います」

お品は何時の間にやら、畳の上へ、水仕事で少し荒れてはいるが、娘らしく光沢つやのある、美しい手を落して、そつと袖口を脛まふたに当てました。

若々しいと言つても、御用聞の娘に育つて、一度は縁付いたこともあるお品は、こう話をさせると、筋も通り情理も立って、隣の部屋で黙つて聞いている

ガラッ八などよりは、余程性根の確りしたところがあります。

「お品さん、よく判った。実は兄^{あにき}哥にすまないから、遠慮していただけの事で、そんな事に骨惜しみをする俺ではない、何とか角の立たないように、蔭から目鼻を開けて見よう——そう言うと、この平次はひどく器量がいいようだが、決してそんな自惚^{うめぼれ}の沙汰じゃない。人が変ると見様も変って、飛んだ手柄をすることがあるものだ」

「有難う御座います、親分」

「まだ礼を言うには早いよ。ところで、縄張り違いの私では飛込んで行っても何かと困ることがあるだろう。お品さんにも少しは手伝って貰えるだろうネ」

「それはもう」

「女御用聞もしやれているだろう、ハッハッハッ、これは冗談だ」

平次は蟠^{わだかま}りない調子でこう言うと、お品もツイ誘^{さそ}われたように、濡れた顔を

挙げて、淋しくニッコリしました。

その時丁度、お静も帰って来た様子。

「それじゃ、あまり遅くならないうちに、一と走り番場町の井筒屋まで行つて見て来るとしよう。お品さんは大した用事もあるまいから、お静を相手に、ゆつくり遊んで行きなさるがいい」

平次はガラツ八を促し立てながら、お静と入れ違いに、怪盗の跡あとを尋ねて、本所へ馳せ向いました。

三

「銭形の親分、有難う御座いました。親分がお出で下されば曲者は捕まったも同じことで——」

井筒屋の番頭の言葉は、追従ついでとばかりは聞えませんが。土地で兎も角、怖い者に思われている石原の利助さえ来てくれないのですから、主人の命と、二三百両の有金をやられた井筒屋にしては、その頃評判の御用聞、銭形の平次の顔を見るのは、全く救いの神のようなものだったのです。

「検屍けんしは済んだのかい、番頭さん」

と平次。

「へエ、昼前に済んで、主人の死体も始末いたしました。人間業らしくない泥棒が、本所中の大家を荒し廻るとは聞きましたが、まさか、人を害あやめるとは思いませんでした」

「飛んだ災難だったネ」

「へエ、有難う御座います。こんな事と知ったら、場所柄で、関取衆でもお願いして置くので御座いました」

平次は番頭の愚痴ぐちに追っ掛けられながら、何かと見て廻りました。家族はかなり多勢ですが、打ちのめされたように、悲嘆の床の中にいる女房、まだ小さい子供達、奉公人、いずれも疑わしい者うたがは一人もなく、泥棒は明かにこの間から噂に上っている本所荒しで、もう六軒も押入つてることですから、家の中では、何にも探しようがあるとは思われません。

「済まないが番頭さん、雨戸をすっかり締めて、昨夜泥棒が入った時と同じようにして貰えまいか」

「へエへエ、それは、わけもないことで」

井筒屋の雨戸をすっかり閉め切ると、平次は一応外へ出て縁側をひと廻りしました。泥棒の入ったのは、南の縁側、僅かばかりの隙から鋸のこぎりを入れて、かなり大きい穴を二つまで開けた上、輪鍵わかぎも棧さんも易々と外したことはよくわかります。

平次は有合せの鋸を借りて、

「八、手前これで外から雨戸あまどを引いて見な、泥棒になったつもりで、出来るだけ静かにやるんだよ」

と平次。

「そんな事はやり付けないから、うまく行かないかも知れませんが、親分」

「馬鹿野郎、そんな事をちよいちよいやられてたまるものか」

平次は冗談を言いながら、家の中へ入って、主人の寝部屋に陣取りました。

「ようがすか、親分」

「黙ってゴシゴシやりな、一々断わる泥棒なんてものではないよ」

「――」

ガラッ八は、泥棒の鋸引きのこぎりびにした雨戸へ、廻し鋸を入れて少しづつ、少しづつ引いております。

白昼、四方は相当やかましい時ですが、それでも、鋸の音は手に取るよう、両替屋の主人や番頭——日頃窃盗せつとうや押込おしこに敏感びんかんになつてゐる者が、どんなによく睡つていたにしても、これだけの細工を知らずにいる筈はありません。

「泥棒の入つたのはあけがた暁方だと言つたね、番頭さん」と平次。

「へエ——かれこれ、寅刻ななつ（四時）過ぎで御座いましたか、旦那様の声に驚いて、駆け付けた時は、雨戸は一枚開けっ放しになつて、薄明りが外から射しておりました」

「月はなかつた筈だね、昨夜ゆうべは？」

「四月の七日で御座います、お月様は夜半にはなくなります」

平次は、薄暗い中で、その儘腕しまたぬを拱こまぬきました。

「八」

「へエ」

「もう沢山だよ」

「そう言わずにもう少し、あと一寸で框かまちに届きますよ」

「馬鹿だな、そんな事したら雨戸は台なしだ、泥棒ごっこはもう沢山だよ」

「そうですかね、こんなお手伝いなら何時でもやりますよ」

「呆れた奴だネ」

四

「ところで番頭さん、あれだけの鋸のこぎり引きが、聞えなかったのはどう言うわけだろう。あんな大穴を二つもあけるには、どうしたって半刻はんときはかかるが」

平次には腑に落ちないことばかりです。

「それがネ親分、昨夜は狸囃子たぬきばやしがひどくて、どうしても寝付かれなくて弱った位ですから、暁方になってぐっすり寝込んだので御座いましょう。あんな大穴を開けるのを、目敏めざといのが自慢の私が知らない筈はありません」
番頭は妙な事を言い出します。

「狸囃子——？」

「え、本所七不思議の一つの狸囃子で御座いますよ。こんな場所ですから、狐や狸のいるに不思議はありませんが、近頃はそれも毎晩のようで、うっかりすると寝そびれて、暁方になってウトウトすることが御座います」

「それは変った話を聞くものだな、本所の狸囃子というのは話の種にはなっているが、真実ほんとうにそんなものがあるとは思わなかったよ」

「知らない方は皆んなそう仰しゃいますが、一度本物を聞くと、不気味でなかなか寝付かれるものでは御座いません」

「矢張り狸が腹鼓はらづつみでも打つと言ったことかネ」

と平次。

「そんな手軽なもんじゃ御座いません。太鼓と笛で、馬鹿囃子そっくりですが、それが、遠いような近いような、陰いんに籠ったような、口ではちよいと申し上げ憎いような不思議なもので御座います」

番頭はすっかり怯おびえているものと見えて、この話になると妙に眼が据って真剣になります。

「笛まで入るのは念入りだネ、どこの森でやっているとか、どこの木立でやっているとか、大凡おおかたの見当位は付くだろう」



「それが親分、不思議なんで、随分腕に覚えのある方が、狸退治をやるんだと言つて、囃子の音に見当を付けて、出かけて見るんだそうで御座いますが、東かと思つて出かけると、西の方から聞え、南の方のつもりで探していると、北に移るんだそうで御座います」

「へエ、それは面白いな」

「ちつとも面白くは御座いません。私共が聞いたんでも、吾妻橋あづまばしの佐竹様お屋敷の辺かと思うと、松倉の方に変わり、原庭しやうげんじの松巖寺しょうげんじの空地かと思うと、急に荒井町の方角に変わつたりいたします。

たぬきばやし 狸囃子たぬきばやしというものは一体こうしたものなんだそうで、大概の方は狸退治どころか、へトへトになつて歸つてしまひます」

「いよいよ面白いな、泥棒が狸だとすると、フン捉まえると狸汁が出来るだらう。ガラツ八、一杯飲めそうだぜ」

平次はすっかり悦えつに入つて、呆氣に取られているガラッ八を顧みました。

「親分、狸が雨戸を破つたり、人を斬つたりするでしょうか」

「そこだよ、俺にも解らなくつて弱っているのは」

平次はこんな気楽な事を言いながら、一度締め切つた雨戸を開けさせて、今度は、斬られた主人清兵衛の死体を、一応見せて貰いました。

右の肩から胸へかけて、たつた一と太刀、袈裟けさが掛に斬つた手口は、恐ろしい腕前で、とても狸や狐の仕業とは思われません。

「親分、こいつは狸にしちや器用過ぎますぜ」

とガラッ八。

「馬鹿、世の中には、どんな狸がいるか、手前てめえなんか解つてたまるものか」

「そうですかねえ、親分」

「ところで番頭さん、その狸たぬきばやし囃子は、何刻ほど続くんだネ」

「宵から始まって、夜中まで、いやどうかしたら、暁方まで続くでしょう。遠くなったり近くなったり、あれが始まった晩は、とても睡られるこつちや御座いません」

「根気のいい狸だネ」

平次はそれつきり黙ってしまいました。狸に興味を失ったのでしよう。

「八、この泥棒狸の手口は、もう少し見なきやア解らないようだ。この間から入られた家を、一軒残らず歩くとしよう」

「へエ——大変ですネ、そいつは」

「骨惜みしちや、いい御用聞にはなれないよ。先ず黙って従ついて来な、帰りは石原の利助兄哥のところを覗いて見舞でも言っつて行こう」

五

平次とガラツ八は、それから日取を逆に取りつて、泥棒に入られた家を六軒、すつかり見てしまいました。

井筒屋の前に入られたのは、原庭はらにわの物持後家で、お紺という四十年配の金貸し、これは幸い怪我はありませんが、用筆筒ようだんすごと庭に持出されて、有金三十両ばかり盗られたのを、夢にも知らなかつたと言う話、手口は井筒屋と同じこと、雨戸を切り開いた鋸目のこぎりめから、宵のうちから、狸囃子が聞えたことまで、そつくりその通りです、家族はお紺の外に用心棒とも手代ともなく使っている嘉七という三十男と、下女が一人。

その前に入られたのは、中の郷の長源寺ちやうげんじという寺、これも手口は同じことですが、奪られたのはほんの二三両、住職がつましいので、金があるという評判に釣られた泥棒の失敗しくじりとわかりました。庫裡くらりの雨戸の鋸目から、狸囃子が宵か

ら聞えたことまで型の通りです。

その前は旗本、深川壺岐いさぎ、松倉町の大きい屋敷ですが、身分に恥じて届出もしなかったという事で、平次も入って見るわけにも行きませんが、手口にも狸囃子にも変りがなかったことは、近所の人が証明しております。

その前は表町の酒屋、和泉屋徳次郎、これも、型の通り、ところで、一番最初に入られたのは、中の郷で、裕福に暮している石上佐伝次という浪人者、二三年前まではさる大藩に仕えましたが病身なのと、殿様が無法なので自分から退転したという五十年配の人物です。家族は内儀と娘が一人、雇人は昔の草履取であったという四十男が一人。

こう調べ上げて石原の利助のところへ寄ったのは、もう夜でした。

「兄哥、加減が悪いそうだな、どんな塩梅あんばいだ」

「お、銭形のか、遠いところを、わざわざ気の毒だったな、なアに大した事じゃ

ねえが、風邪かぜを引いたのに、疲れが出たんだらう、明日あたりから、仕事の方に取とりかかろうかと思おもっている」

利助は襦どてら袍を引ひっかけて、長火鉢の前へ出て来きましたが、何なにとなく勝すぐれない顔かほをしておおります。

「まア、大事にするがいい、無理をしちや後へ悪わるかろう」

「お品の奴やつが心配して、医者いしやを呼よべの、お詣まがりをするのと言いうが、この年としまで、薬くすりというものを嫌きらいで通とした利助きすけだ、今更いまさらそんな事ことをしたつて、何なにの足あししにななるものじゃねえ」

顔色かほいろは悪いが、相変あひららずの利きかん気きで、平次へいじもすすっかり、今日けふの始末はじまつを打明うちあけそびれてしましまいました。

そのうちうちに、お品しんは、晩ばんの用意よういをして一本いっぴんつけて参まります。

「何なににも御座ございませんが、有合あせで」

と言ったような取なし、これは馴れ合ずくですから、平次も遠慮するようなしないような、ズルズルベツタリ盃を嘗めていると、やがて戌刻いっつ（八時）という頃。

「おや、ありや何だい——」

遠くの方から節面白く、太鼓と笛の音が聞えて来たのです。

「あ、又始まりやがった」

石原の利助はあまり気にする様子もありません。

「何だいありや、兄哥」

「狸たぬき子ばやしさ、馬鹿馬鹿しい」

「押込の入った晩には、必ず狸たぬき子ばやしが宵から聞えるって言うが、あの音なんだネ」

「世間じゃそんな事を言うが、まさか狸が泥棒ぐと共謀ぐになっているわけじゃあ

るめえ」

「いや、そうでないよ兄哥、俺は一つ、明日は狸狩りをやろうと思うんだが、若い者を少し貸して貰えるだろうネ」

「構わないとも、どうせ遊んでいるようなものだ。あの泥棒と来た日には、若い者なんかの手に負える代物じゃねえ」

平次は間もなく暇乞いとまごをして出ました。が、門口へお品を呼んで、何やら耳打ちするとその儘ガラッ八をつれて、神田の家とは方角違いの、原庭の方へ道を急ぎます。

「親分、どこへ行きなさるんで」とガラッ八。

「黙ってついて来るがいい、狸のお宿を探すんだ」

「へエ——」

ガラッ八は渋々ながら、平次の後から、影のようにピタリとひっ付いて、やってきました。

井筒屋の番頭が言ったように、馬鹿囃子は暫く原庭の方から響いておりましたが、平次が原庭へ行った頃は、何時の間にやら方角が變つて、それが松倉の方になっております。

「親分、あまりいい気持ちじゃないネ」

とガラッ八。

「何をつまらない、狸の方でガラッ八さんが怖こわいって言ってるぜ、黙つつてついて来な」

平次は昼一度歩いた通り、原庭の金貸後家のお紺の家から逆に取つて、中の郷の石上左伝次の家まで五軒を一々調べて廻りましたが、さて何の掴つかみどころもありません。相変らず狸囃子は、何処からともなく、人を馬鹿にしたような

長閑さで聞えております。^{のどか}

「今晚もまた、どこかへ入られるだろうが、困ったことに防ぎようがない、ガラッ八、帰ろうよ」

「へエー」

二人は何時の間にやら大川端に出ておりました。

「明日は一つ狸退治だ。畜生ッ、その時こそ逃しはしねえぞ」

六

翌る日の狸狩りは、本所中の物笑いの種になりました。

助の子分を十人ばかり狩り集めて、西は大川、東は業平橋、^{なりひらばし}南は北割下水、北

は枕橋まくらばしの間を、富士の巻狩りほどの騒ぎで狩り出したものです。

平次は脚絆きゃはんに草鞋わらしと言った装束で、手槍を担ぎ、子分達はさすがにそれほど大袈裟には用意しません、それでもいい若い者が、百姓一揆き見たいに、竹槍まで提ひっさげて押し廻したのですから、本所中はお祭のような騒ぎ。

朝から始まって夕刻まで、藪という藪、林という林、墓地から田圃から、町家の裏、軒の下、下水の中まで探し廻りましたが、狸はおろか狐も貉むしなも飛出しはしません。見かけたのは野良犬とドブ鼠が精々、弥次馬がゾロゾロついて歩いて、江戸ッ子特有の辛辣しんらつな皮肉を浴びせるので、子分達は顔を赤くするような有様です。

陽が暮れて引揚げる時、利助の子分に一分ずつはずんだので、その方の悪口は封じましたが、世上の噂はまことに散々。

「見ろや、銭形とか何とか言っただって、あの態ぐまは何だい。石原の親分が病気で

なきやア、あんな馬鹿なことを黙って見ちやいめえ」

「全くだよ、狸が泥棒したって話は、開闢かいびやく以来だ。猫に小判ならわかるが、狸に小判じゃ洒落しやれにもならねえ。神田からわざわざ本所まで恥をかきに来たようなものさ」

いやもう滅茶滅茶です。

平次はしかし驚く様子もなく、一向平気な顔をして、予期した幕切れを待っております。

それから三日目、とうとうその日が来ました。

「親分、お品さんが見えましたよ」

取次ぐガラツ八をかき退けるように、平次は待っていましたと言わぬばかりに飛出しました。

「お品さん、挨拶は抜きだ、あれはどうなった？」

「親分、とうとう出かけましたよ」

「そいつはしめたッ」

「親分に言い付かった通り、押上の笛辰ふえたつの家を三日見張っていると、今日昼頃どこかの小僧が使に来ました」

「フムフム」

「すると笛辰は夕方からプラリと出かけたんです。余っ程後をつけようと思いましたが、万さと一さと覚さとられると藪蛇やぶへびだと思って、取敢とりあえず駕籠でここまで馳せ着けました」

駕籠で来たくせに、あまりの緊張にお品は息を切っております。

「それで何もかも片付くだろう。平次の狸狩りにも、見る人が見れば理窟があるってわけさね、お品さん」

「有難う御座います。この上はどうか、お出かけ下すって、手配をお願いします」

す

「いや、本所は石原の利助親分の縄張り内だ、大急ぎで家へ帰って、どこまでもお品さんが思い付いた事にして、原庭の大法寺きようそうの無住になっている荒寺きようそうの経蔵に手を入れさせるがいい、狸の巣はそこだ」

「――」

「狸は弱いから、手先が二人も行けば沢山だが、金貸後家のお紺の家には凄すごいのがいるぜ。そこへは利助兄哥と、子分の者十人位で、すっかり用意をして踏込むがいい、こつちには手強てじわいのが要いる」

「親分は」

「俺は行くまでもないだろう、狸はもう罠わなに落ちているんだ」

「でも」

お品はひどく心許ない様子でしたが平次に追い立てられて、石原の家へ駕籠

で歸りました。

七

その夜の捕物は、平次の狸狩りにもまして本所の人達を驚かせました。

大法寺の経蔵に向つた二人の手先は、何の造作もなく、その中で馬鹿囃子をやっている、押上の笛辰と、その弟子で太鼓の上手じょうずと言われた、三吉を縛つて来ました。

同時に金貸後家のお紺の家に向つた一隊は、そんな手軽なわけに行きませんでしたが、お紺を始め、その手代の嘉七、下女のお松を、どうやら、こうやら大骨折で縛り上げました。後で聞くと、手代の嘉七は武家上りだそうで、腕が仲々確かりにしていたので、利助の子分に二三人怪我を拵えましたが、幸いそれ

もたいしたことでもなく済みました。

本所を荒し廻った大泥棒、——井筒屋の主人まで殺した曲者は、言うまでもなくお紺とその手代の嘉七で、狸たぬき囃子ばやしは世人まじを惑わして、嘉七お紺の仕事を助ける、笛辰と三吉の仕事だったのです。その後、与力笹野新三郎の調べに對して、嘉七は、

「へエ、誠に恐れ入りました。狸囃子を使ったのは、本所の七不思議をもじつたに相違ありませんが、実は貸本の『絵本太閤記』から思いついたことで、日吉丸が、蜂須賀小六のところから、刀を盗み出すのに、三晩も続けて笠を雨落あまふりに置き、小六の心を疲らせて、暁方ウトウトとしたところへ入って首尾よく取つたという術てを用いたので御座います。雨落の笠代りに狸囃子を使ったままで御座いますが、もう一つ、狸囃子を聞かせたわけは、あの囃子の音に合せて、鋸のこぎりを引くと、目の覚めているものでも、一寸気が付かないからで御座います」

と言つております。

この手柄を一人占めにして、石原の利助はどんなに面目をほどこしたかわかりません。近頃は利助に愛想を尽かしていた笹野新三郎も、口を極めてその頭
のよさを褒めました。

が、利助にしては、これほど見当の違ったことはありません。自分が何にも
知らないうちに、大手柄をしていたのですから、まるで夢のような心持です。

娘のお品を賣^せめて見ると、これはもう、言いたくて待ち構えていたところで
すから、何も彼^かも平次の指金だったことを一毫^{ごう}の隠すところなく言つてしま
いました。

薄々平次の息が掛つていゝとは思いましたが、そう判然^{はつきり}わかつてしまうと、
利助もジツとしてはいられません。手土産を用意して、神田まで一と走り。

「平次兄哥、面目次第もない。何もかもお品から聞いたが、狸囃子の曲者を挙

げさせた指金は、兄哥がやってくれたんだってネ」

日頃面白くない仲だけに、利助も我慢の角を折って、畳に手を突きたい心持になります。

「兄哥、冗談じゃない、俺は何を知るものか、狸狩りをやって物笑いの種を拵^{こしら}えただけさ。曲者の巢を突き留めたのは矢張りお品さんに相違はないよ」

平次はなかなか真実の事を言おうとしません。

「まあいい、折角そう言ってくれるなら、強^たって聞くまい。俺の心の中だけで、兄哥の親切を忘れなきやア——」

利助はこんな事を言って、後は、お静の手料理で酒になりました。

「親分、あつしには腑に落ちない事だらけだ、利助親分に手柄をさせた心持はまあ判るが、どうしてあの曲者がお紺の家にいると解ったんです。後学のため

に教えておくんなさい」。

とガラッ八は、利助の帰って行く姿を見送りながら、平次に問いました。

「何でもないよ、六軒の雨戸を調べると、あとの五軒は、如何にも狸囃子に合せて、半刻も一刻もかかって引き切ったように、鋸目が細かくなっているが、お紺の家の雨戸だけは、鋸目が荒くて、一気に引っ切ったことが判ったんだ」

「成程」

「五軒も六軒も荒した曲者が、物持で通ったお紺の家へ入らないのはおかしいと思われるから、自分の家へも入ったように、嘉七とお紺が細工をしたんだよ」
平次の観察は精緻せいちをきわめます。

「ところで、大法寺の経蔵でやった馬鹿囃子が、どうしてあんなに近くなったり、遠くなったり、東に聞えたり、西に聞えたりしたでしょう」

とガラッ八。

「もつともな疑いだが、太鼓は風呂敷を被せると音が鈍くなつて遠くの方で叩くように聞えるし、笛は上手になると、強くも弱くも自由に吹けるだろう」

「成程ね」

「それから、あの経蔵には、入口が一つと、窓が二つある、その一つ一つを開けたり閉めたりして囃すと、音は酒井棟のお邸に響いたり、佐竹様の木立に響いたり、どうかすると、大川の方へ抜けたり、いろいろの方角に聞えるんだ。

今度一つ試して見るがいい」

「へエ——そんな事もありますかねえ」

「まだ判らない事があるかい」

「あの日、昼一度廻ったのに、夜もう一度六軒の家を廻ったのは？」

「あれはおおしくじり大失策さ、昼は鋸目にばかり気を取られたので、夜もう一度狸囃子をやった場所を探しに行ったんだが、暗くて何にも判らなかつたんだ」

「狸狩りは？」

「そこで、翌る日狸狩りということにして、土蔵か、穴蔵か兎も角、何の方角へも自由に囃子の音を響かせるにいい場所を探したんだ。お蔭で銭形の平次はまぬけ間拔まぬけになって、石原利助が器量を上げたのよ」

「つまらない事になったものですね」

「利助兄哥も、これで引込みが付き、俺もお品さんへの義理が済んだというわけさ」

平次はそう言つて豊かにガラッ八を顧みました。頭の鈍いガラッ八にも、何となく失策しくじり平次へいじの尊とうとさがわかつたような気がしました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「文藝春秋オール讀物號」昭和七年五月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

たぬき囃子



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>